Komazawa University

ディケンズの「公開朗読台本」研究

荒　井　良　雄

序　文

神は「光あれ」と言われた。すると光があった。
神はその光を見て、良しとされた。
（『旧約聖書』創世記・第１章・第３－４節）[1)]

「チャールズ・ディケンズ全集」全21巻[2)]の膨大な量の作品群の中で、最も広く愛読され、作者自身の公開朗読では127回もの多きを数え、第２位の朗読回数を誇っているのが、『クリスマス・キャロル』である。この中編小説は、1843年12月19日に初版が出版された。『クリスマス物語集』[3)]に収められている５編の中の１編であるが、純文学としても児童文学とても、多種多様な形で版を重ね、翻訳され、劇化され、映画化され、ラジオやテレビで放送され、ミュージカル化され、英語の教科書にもなって、世界中の人々に感動を与え続けてきた。その原因は、キリスト教文化や時代や民族を越えて、万人の心に訴えてくる普遍的なテーマがあるからで、それは「貧しく弱い人々への思いやり」と「愛の喜びと悲しみ」の主題にほかならない。

ディケンズ自身が、貧困のどん底を身をもって体験し、愛の美しさと貴さ、そしてその悲哀を、痛いほど知り尽くしていただけに、このテーマは、全作品の核として、繰り返し変奏されて、作品のどこかに、執拗なまでに必ず顔を出す。なかでも「弱者擁護」のテーマは、先輩のシェイクスピアも、後輩のモームも、ディケンズには遥かに及ばない。それをメロドラマ的と呼ぼうが、センチメンタルと言おうが、そして大衆的と冷笑しようが、まじめに働く人々や貧しい弱者の擁護こそは、ディケンズがリアリスティックな詩的散文で、全身全霊を込めて活写した主題であり、思想であり、ユーモアの原点でもあった。ディケンズは、この独自のテーマを、活字を媒体にして読者に伝えるだけでは満足せず、後半生は自らの肉声による公開朗読によって、生命を縮めてまでも大衆に訴えるという手段をとった。それが自作の公開朗読であった。

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ディケンズは、1853年12月27日に、『クリスマス・キャロル』の慈善朗読会で始めた公開朗読を、亡くなる約3か月前の1870年3月15日、ドクター・ストップがかかるなか、初心に帰り、『クリスマス・キャロル』でもって終結させた。『クリスマス・キャロル』こそは、ディケンズが真心を込めて世界の人々に贈ったクリスマス・プレゼントだったのである。

本論では、ディケンズが残した21編の「公開朗読台本」を、ディケンズ文学の本質である「弱者擁護」と「愛の喜びと悲しみ」のテーマを中心に、『クリスマス物語集』、『クリスマス短編集』[4]、「長編小説の名場面と抜粋」、そして「未朗読台本」の4つのグループに分類して、分析してみたい。

第Ⅰ章 『クリスマス物語集』

1. 『クリスマス・キャロル』[5]

ディケンズが、バーミンガムにおける最初の慈善公開朗読会において、『クリスマス・キャロル』を朗読したときは、約2時間を予定していたところ、3時間もかかったという。2千人を越える聴衆を前にして、朗読の速度を落とさざるをえなかったものと思われるが、朗読台本のカットが少なかったことも、その原因の一つであろう。1857年にロンドンで初めて朗読したときには2時間半、1858年5月のロンドンにおける第1回公開朗読シーズンで読んだときは2時間、その年末までには、もう一つの人気朗読台本である『ピクウィック・クラブ』の「裁判」の場面と組んで2時間のプログラムにするため、1時間半に縮小された。しかしディケンズは、最初から演劇や朗読会の標準的な上演時間である2時間を考えていたし、1859年12月のロンドンのクリスマス朗読会で使用した台本も2時間を目標にしていた。その台本のカットは恐らく最初の慈善朗読会のときのものに近いと推定されている。そこで、フィリップ・コリンズ編の『朗読台本全集』[6]に収録されている2時間の台本を基にして『クリスマス・キャロル』の朗読を考察してみたい。

『クリスマス・キャロル』は、『クリスマス物語集』に収録されている5編の冒頭におかれていて、ディケンズの全作品の中で抜群の知名度がある代表作であるばかりか、イギリス文学はもとより、「世界文学の最も人気のある古典文学作品の一つ」でもある。この中編小説はオックスフォードの全集版では70ページ、コリンズ版の朗読台本では29ページだが、その中には作者の体験に基づく自伝的要素はもとより、巧妙な語りの魅力と演劇的な面白さ、写実性、ファンタジー、象徴性、逆説とユーモア、そしてクリスマス精神を

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

基調にした欧米文化の種々相が、緊密な構成力と高度な詩的完成度でもって凝縮されている。したがって、この作品を分析することによってディケンズ文学の本質と特色を垣間見ることが出来るのである。

まづ第一に指摘すべきは、言葉の音楽性であろう。ディケンズが俳優としても優れていて、朗読の名手だったという事実は、ディケンズ文学の演劇性と音楽性に深い関係がある。『クリスマス・キャロル』という題名そのものが音楽を想起させるし、全体を5つの「ステイヴ」(詩の節)に分けているので、5幕劇あるいは5節の長い散文物語詩と見なすことも出来る。この作品が、そのまま約3時間の朗読台本として使用出来るということは、もともと演劇性と音楽性を備えていたということだろう。ディケンズ文学が朗読に適しているのは、ディケンズ自身が優れた朗読家でもあって、言葉の音楽性に敏感なばかりでなく、演劇的効果を駆使出来る「語り」の文学者であったからにほかならない。スクルージの性格を一言で表す「ばかばかしい!」(ハムバグ!)[7] の繰り返しによる音楽的相乗効果、朗読台本ではカットされたが、『鐘の音』ではテーマそのものになる鐘の音の音楽的効果[8]、そしてフェズウィグ老人の家庭舞踏会の場面の活気ある語りのリズムによるの言葉の音楽性[9] など、実例は枚挙にいとまなしである。

次は、写真のように写実的で詩的な情景描写と、登場人物の性格を浮き彫りにしたセリフによって描出される、演劇や映画の一場面のような迫真の場面造形の秀抜さであろう。情景描写とセリフが交互にくる呼吸と間、朗読ではカットされるが、各セリフに付けられたト書(ディレクション)による具体的な指示は、ディケンズの小説の演劇性と映画性を裏付ける証拠であるばかりか、それは取りも直さず朗読台本としても優秀であることの証明にもなっている。第4節「最後の精霊」の墓地の場面を、カメラの移動撮影やクロース・アップやパントマイムの見事な効果、そして所作や音声表現の適確なト書の実例として引用するだけで十分だろう。これは小説や戯曲というよりも、優れた映画のシナリオだ。

> スクルージは震えながら墓石に近寄り、相手の指の方向をたどって行って、誰も顧みない墓石に書かれた名前を読むと、それは「エベネザー・スクルージ」。「あの死の床に横たわっていた男は、この私だったのですか」スクルージは膝をついて叫んだ。
>
> 精霊の指は墓からスクルージに向けられ、また墓の方に戻った。
>
> 「ひどいですよ、精霊さん!　とんでもない、やめてくれ、やめてく

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

れ！」

指はそのまま動かなかった。(全集版70ページ)[10]

しかし、なによりも、『クリスマス・キャロル』の魅力は、セリフと情景描写が織り成す見事な言葉の音楽美に裏打ちされた絶妙な「語り」にある。ディケンズの「ストーリー・テリング」には、作者がナレーターを務める場合と、作者の創造した登場人物がナレーターを兼ねる場合と、この二つが巧みに交錯している場合とがある。『クリスマス・キャロル』の場合は最初の例で、ナレーターとしての作者の巧妙な話術に導かれて、主人公スクルージの現在と過去と未来が、一本の太い柱となって、全体を支配している。この単純明快な筋立てが、実は聴衆を最後まで引っ張って行く語り芸の原点なのである。

そして、登場人物の鮮烈な性格描写も、『クリスマス・キャロル』の大きな特色である。特に主人公のスクルージの性格造形は強烈で、モリエールのアルパゴン[11]とともに、守銭奴の代名詞にまでなっている。スクルージの祖先には、バラバス[12]やシャイロック[13]がいるが、金銭とか過去の出来事といった「脅迫観念にとり憑かれている人間」は、ディケンズが好んで描くタイプの一つである。この貪欲で頑固で孤独な老人と対照的なのが、まじめな働き者のボブ・クラチットで、その善良な性格と幸福な家庭生活が、地味だが美しく輝いている。ボブは現実を率直に受け入れ、忍耐の美徳を貫くことで、最後に幸せを手に入れる堅実な人間像の典型である。だが、最も純粋で感動的な登場人物は、ボブのかわいい息子のティム坊やで、松葉杖をついた身体の弱い少年の存在は、ディケンズ文学の「弱い者への思いやり」のテーマの美しい結晶である。この少年に対するスクルージの憐憫の情の目覚めが、慈悲深い好々爺に変身する動機の一つなのである。

最後になったが、最大のテーマは、「愛の喜びと悲しみ」の主題である。「愛の悲しみ」のテーマは、第2節の過去の場面に出てくる。金銭欲と出世欲に目が眩んだ若き日のスクルージに振られた持参金の無い喪服の美しい娘も、その娘を捨てたために孤独な守銭奴となったスクルージも、ともに「愛の悲しみ」のテーマを体現している。この場面に「これが世間の公平な扱い方なんだ！貧乏ほど辛いものがない一方、富の追求ほど激しく非難されるものはない」[14]という鋭い逆説が挿入されている点も見逃せない。「愛の喜び」のテーマは、自分中心的で自己愛の権化であったスクルージが、愛が無かった淋しい自分の過去と、愛が一杯の他人の現在の家庭と、悲惨な死にか

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

たをする自分の未来を、夢の中で精霊に見せられたために、慈悲心と隣人愛に目覚めるラスト・シーンで、高らかに歌いあげられる。この魂の高揚は、ベートーヴェンの交響曲第5番のフィナーレや交響曲第9番のフィナーレの「歓喜に寄す」の大合唱に似た見事な音楽的効果を発揮する。ディケンズの朗読台本は、第3章と第4章を続けて朗読するように工夫されていて、そこにはベートーヴェンの交響曲のような音楽的、演劇的、芸術的なフィナーレの効果が意図され、計算されている。朗読によって一気に読み上げた場合、スクルージの改心や変身は、不自然さを通り越して、芸術的に昇華された心地よい高揚感を聴衆に与える。語りの美学であり、朗読芸の極致であると言えよう。この結末には、人間の善意と改心の可能性を、裏切られてもあくまで信じようとするディケンズのヒューマニズムの精神が燦然と輝いているのであって、この突然の変身は馬鹿げているという人の先手をとって、作者は結びに次の言葉を用意している。「この変身ぶりを見て笑う人もいましたが、スクルージは勝手に笑わせておいて、少しも気にかけませんでした。この老人は頭が良くて、この世ではどんなことでも初めのうちはさんざん笑いものにされることを知っていましたし、また笑う人は盲目だということも知っていたからです」[15)]。

けちで陰気なスクルージの心象風景のように、死と亡霊と悪夢と暗くて寒い夜で始まった『クリスマス・キャロル』は、主人公の改心とともに、「霧も靄もない、明るくて晴れ渡った、陽気で、浮き浮きするような、ひやりとする」[16)] クリスマスの朝になって終わる。ディケンズは、悲惨で暗い人生に、明るい光と希望をもたらす人情味の豊かな作品を創造することによって、クリスマスの精霊や慈悲の精神や人類愛と同一視されるクリスマスのサンタクローズになったのである。

最後に、ディケンズが朗読したときの様子や観客の反応の記録を少し引用しておく。1858年4月19日のブラッドフォードにおける朗読には3,700人の観客が詰めかけたが、「しかし笑い声や歓声にもかかわらず、観衆はまるで一人になったように聴き入っていた」。「一人の男がこれほど作品の精神に全身全霊を投入したのを、今まで見たことも聞いたこともなかった」。「ディケンズ氏の声は、もちろん力強くて表現力に富み、とくに低音が豊かで、自由自在に完全に統御されていた。セリフは細部に至るまで劇的に処理され、どの登場人物も等しく見事に演じられた。ナレーションや評言の部分は、もちろん作者の地声で読まれた」。「ディケンズの表情の表現力は素晴らしかった。

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

彼の公開朗読の魅力は、しゃべり方と同じくらい、仕草に依存している」。「この作者の自作朗読を聞いたことのない人は、楽しさを半分も体験していない。隠れたユーモアの部分を、どのページでも表現して見せるからだ」[17]。

2. **『炉ばたのこおろぎ』**[18]

バーミンガムの慈善公開朗読会で、ディケンズが『クリスマス・キャロル』を朗読した翌日、1853年12月29日に1回だけ朗読したのが『炉ばたのこおろぎ』であった。『クリスマス物語集』の第3編で、1845年に出版された。この作品選択は主催者からの要望で、ディケンズ自身は「もっと小さな場所で朗読する目的には非常に良く適っているであろうが、バーミンガムのタウン・ホールには、もっと劇的で強力な主題が必要だ」と答た。前日に大好評を博した「『クリスマス・キャロル』に勝るとも劣らない素晴らしい朗読だったが、ディケンズ自身はそれほど気にいっていなくて、確かに朗読のための脚色としては、あまり良い出来ではない」という批評もあった。しかし、ディケンズ自身は、この作品に何度も意欲的に再挑戦している。1858年4月29日から約3か月間にわたってロンドンで開催された最初の有料公開朗読会の初日と5月20日に朗読したほか、続いて行われた地方公演でも1回だけ、9月29日にエディンバラで朗読したが、これを最後に、二度と朗読のレパートリーに入れなかった。したがって、朗読回数は最低の僅か4回である。

ディケンズ自身の言葉にあるように、『炉ばたのこおろぎ』は内容が地味なので、それこそ炉ばたで「おとぎばなし」を語り聞かせるような雰囲気で朗読するのが良く、小人数のための小さな会場での朗読に適した台本である。全集版で76ページの原作を、ディケンズはコリンズ編の朗読台本全集に再録されているように、36ページに短縮したが、各章をそれぞれ少しずつカットしただけで、原作通りの3章構成によって物語を展開している。テーマは、副題として付けた「家庭のフェアリー物語」に暗示されているように、幸福な家庭の在り方で、妖精の出て来るクリスマス・ファンタジーである。全編に溢れているのは、ディケンズ文学を貫いて流れている人間の善意を信頼する精神と、貧しくて弱い人々に対する限りない愛情、すなわち心の美しい善良な人々の賛美である。

「第1のさえずり」では、言葉の音楽的効果が顕著だ。「こおろぎ」と「鉄びん」の合唱という音楽を背景に、真面目な初老の運送屋ジョンが、白髪の老人を拾って来て泊めてやるエピソードが中心になっている。「炉ばたにこおろぎがいるなんて、世の中でいちばん運がいいのよ」[19]と若い妻のドット

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

が言うセリフに、こおろぎが幸運の象徴であることが暗示されている。

「第２のさえずり」では、その老人が白髪のかつらを取ると、ジョンの貞淑な妻がかつて思いを寄せていた青年エドワードであったことが分かって、善良な夫のジョンが悲嘆にくれる筋が中心である。

「第３のさえずり」では、過去のことをすべて許そうと決意するジョンの寛大な心に妻のドットが感動して不変の愛を誓う話と、若いエドワードの長い間の恋慕が実り、ドットの友達のメイと結婚することになって、すべてが目出たく収まる話が中心である。シェイクスピアの『ルークリースのレイプ』や『オセロー』の愛と嫉妬の悲劇に発展しかねないテーマを、夫の寛容と忍耐によって、幸福な家庭の理想像に変えてしまうあたりが、いかにもディケンズである。

頑固で意地の悪いグラフ・アンド・タクルトン老人が、若いメイと結婚する夢を、放浪の旅から帰って来たエドワードに壊された結果、孤独に耐えかねて、幸せな大団円の仲間入りをするエピソードは、スクルージの変身のヴァリエーションだ。そして「弱者擁護」のテーマは、貧しい人形造りケイレブと盲目の娘バーサの悲哀に満ちた親子関係に表現されている。ケイレブは娘を哀れんで、厳しい現実を虚偽の幕で覆い隠していたが、娘が現実と直面した結果、目が見えるようになる。象徴的で感動的な美しいエピソードだが、この筋と運送屋夫婦の物語が入り組んで展開する上に、スクルージのような強烈な主人公の大黒柱を欠いているあたりに、文学的には成功した魅力ある「おとぎばなし」が、朗読台本として成功しなかった理由があるように思える。

3. 『鐘の音』[20)]

ディケンズの親友で、『ディケンズ伝』を書いたジョン・フォースターは『鐘の音』の原稿を携えたディケンズが、ゼノアからロンドンのリンカンズ・イン・フィールドのフォースター邸へやって来て、カーライルなど十名ほどの友人の前で朗読したときの様子を伝記に記録しているばかりか、『鐘の音』の挿絵画家の一人であり、その日の聴衆の一人であったダニエル・マクリースが描いたプライベートな朗読会のスケッチも伝記に挿入している。出版を前にして、この非公開朗読会が行われたのは、1844年12月２日の午後６時半であった。『クリスマス物語集』の第２編にあたる『鐘の音』は12月16日に刊行されて、２万部を売り尽くしたという。この作品をディケンズが初めて公開朗読したのは1858年５月６日で、それ以後の朗読回数は10回、少

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ない方の部類に属している。

この中編小説の着想は、イタリアのゼノアに滞在していたディケンズが、強風とともに鳴り響く鐘の音を聞いた時にひらめいた霊感から得たとされている。年末から年始にかけてのロンドンを舞台に、いつも小走りに駆け回っているトビー・ヴェック、通称トロッティの名で親しまれている60歳を過ぎた貧しい「公認配達屋」（チケット・ポーター）が主人公で、語り手は作者であるが、この善良な働き者の老人の内的独白と幻想的な鐘の音が、作者のナレーションと一体になって、朗読台本としての効果を高めている。

この作品における「弱者擁護」のテーマは、裕福で偽善的な紳士階級との対比で、雄弁に主張されている。その点では、ディケンズ晩年の最大傑作『大いなる遺産』の原型がここにある。朗読回数が少ないのは、紳士階級の「お偉方」を皮肉に戯画化した作者のブラック・ユーモアが、公開朗読会の聴衆中の多くの紳士淑女のお気に召さなかったからかも知れない。作者の貧困体験に根ざした同情と共感は、あくせくとその日の稼ぎに追われている主人公のトロッティばかりではなく、夜遅くまで針仕事をして生活費の一部を稼いでいる娘のメッグ、その可憐なメッグと貧しいが故に３年間も結婚出来ないでいる真面目な鍛冶屋の青年リチャード、そして浮浪者のウィル・ファーンと、彼が兄から引き取って育てている９歳のみなし子リリアンなど、作品中に登場する弱い立場の人々全員に及んでいる。

貧困のどん底を体験したディケンズは、古い教会の鐘の精霊や妖怪たちを登場させた幻想的な場面を、夢の中でトロッティに見せ、未来の「絶望の果てまで」導くことで、どんなに苦しくても現実を忍耐で生き抜く勇気を鼓舞する。「いったい、わしら貧乏人は、とどのつまりが、どういうことになるんだろう。もうすぐ年があけるというんだが、なんとかもう少し人間らしくなりたいもんだ！．．．わしはたいていのときなら、ひとにまけないくらい我慢できる。．．．やっぱりだめだ。わたしたちゃ、まともな人間のうちにはいれやしない。なってない。やっぱり生まれつきの悪人だった」と言って宿命論的になっていたトロッティは、夢の中で「絶望の果てまで」を見た結果、厳しい現実を受け入れ、人間が変わったようになって叫ぶ。「信頼と希望を持たねば。自分たちを疑っちゃいけない。お互い同士が、よい人間であることを疑ってはならない」[21)]。しかし、トロッティは善良な働き者で、スクルージのような強烈な性格の守銭奴ではないので、この変身はそれほどドラマティックでない。そのあたりに朗読回数の少ない原因があるのかも知れ

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ない。

「古い年を送り、新しい年を迎えるために鳴り渡った鐘の音についての妖怪（ゴブリン）物語」[22] という副題をもつ『鐘の音』は、全集版で74ページ、コリンズ版の朗読台本では24ページで、カットは少なく、原作の4部構成もそのまま、最後は原作通り「語り手」としての作者のメッセージで終わる。「あなた方のお心次第で幸福になれる、より多数の人びとに新年の幸せがありますように！　毎年が前の年よりも幸せでありますように」[23]。

『クリスマス物語集』には、ほかに『人生の戦い』（1846）[24] と『憑かれた男』（1848）の2編が入っている。後者は未朗読に終わったが、朗読台本は残っている。前者の劇化上演はあったが、公開朗読は行われなかった。

第Ⅱ章　『クリスマス短編集』

1.　「哀れな旅人」[25]

ディケンズの朗読台本21編には、『クリスマス短編集』の総称のもとに出版された21編の中編や短編の中の8編が含まれている。ディケンズ自らが経営や編集など一切の仕事を引き受けて出版した週間雑誌『家庭の言葉』や『一年中』のクリスマス号に掲載した作品が中心で、「哀れな旅人」は、『家庭の言葉』の1854年クリスマス号に発表された「七人の哀れな旅人たち」の第2章の物語で、クリスマス・シーズンに作者自身が非公開で朗読をして好評を博したという。オックスフォードの全集版で15ページ、コリンズ版の朗読台本では10ページの「哀れな旅人」が、ロンドンで初めて公開朗読されたのは1858年6月17日、「ミセス・ギャンプ」や「ひいらぎ旅館のブーツ」とともに、短編作品の「3本立て」興行のプログラムの中の1編として公開朗読のレパートリーに入り、それ以来ディケンズは30回も朗読した。

語り手が、親戚の一人だと言って紹介するのは、貧しい飲んだくれの青年リチャード、通称ディック、改称してダブルディック。失恋の結果、やけくそになった22歳の文無し放浪者ダブルディックが、チャタムの軍隊に死を覚悟で入隊するところから始まり、尊敬すべき上官に出会って真面目人間に戻り、波乱万丈の戦場体験を積んで出世する。そして自分を立ち直らせてくれた人生の恩人である上官を殺したフランス軍人への復讐に生きて、自分も負傷するが、最後には昔の恋人に再会し、敵をも許して終わる。貧乏、失恋、失意、運命的な出会い、献身、勇気と努力と忍耐、出世、友情と約束、復讐、劇的な再会、そして寛容と許し、といったディケンズ文学でお馴染みのテー

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

マやエピソードが、メロドラマティックに展開する第一級のエンターテインメントで、この戦争あり人情ありの愛と憎しみと許しのパノラマ風の放浪物語を、最後まで飽きさせずに引っ張って行くのは、これまたディケンズ文学特有の堅実な構成力と表現力に裏打ちされた見事な「語り」の技術である。この貧しい弱者の出世談で感動的なのは、献身の美徳で成功し、強い立場になった主人公が、最後に見せる「すべてを許す神」[26] のごとき「許し」の心である。

2. 「ひいらぎ旅館のブーツ」

7歳前後の少年と少女のイノセントで牧歌的な駆落ちをテーマにした純愛物語である「ひいらぎ旅館のブーツ」は、週間雑誌『家庭の言葉』の1855年クリスマス号に発表された。全集版の一冊『クリスマス短篇集』に、「ひいらぎ」(「ザ・ハリトゥリー」)の題で収録されている短編の第2話「ザ・ブーツ」がそれで、全集版では11ページ、朗読のための改訂が少しあるコリンズ編の台本では10ページである。ディケンズが初めて公開朗読のレパートリーに入れたのは1858年6月17日で、短編台本「三本立て」公演の一本として朗読した。ディケンズは、それ以来、この感動的で、ほほえましく、しかもユーモラスな小品を好んで取り上げ、その朗読回数は81回、『ピクウィック・クラブ』の「裁判」の場面の164回、『クリスマス・キャロル』の127回に次いで、第3位を占めている。

語り手である私が、大雪のため「ひいらぎ旅館」に閉じ込められていたとき、ブーツの別名を持つ宿の使用人コブスが、ぶらりと部屋へ入って来て、これまでに出会った最も不思議な出来事の一つとて話したのが、駆落ちの名所として名高いイングランドとスコットランドの境に近い村グレトナ・グリーンに出かて結婚しようとする可愛いい少年少女の物語だった。シェイクスピアの純愛悲劇『ロミオとジュリエット』で、若い男女の秘密の結婚を助けるのはローレンス神父とジュリエットの乳母であったが、この短編ではブーツがその役目を演じている。ブーツというのは、宿屋(イン)で客の靴を磨いたり、荷物運びなどの雑用をする使用人のことだが、この小品では、そのブーツが可憐な子供の信頼を裏切り、宿の主人にヨークの子供の親元へ連絡に行ってもらって、このロマンティックで実にいじらしい純愛の夢を壊してしまう。ハリー坊やが、大好きなノーラ嬢ちゃんに、お別れのキスをする場面を、ドアの隙間から覗き見していた女中の一人は、「あの二人の仲を裂くなんて恥じ知らずだわ!」と叫ぶ。

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

純粋な弱者を代表する２人の少年少女の純真無垢な夢と理想を、弱者を守るべき大人の現実主義が台なしにしてしまう結末が皮肉だが、ディケンズの結ばれなかった初恋の体験が、この小品を心にしみわたる美しい芸術作品に昇華していると言えよう。語り手が、いつの間にかブーツになり、そのブーツが子供のあどけない対話を引用しながら話しを進めいく巧妙な話術は、ディケンズの朗読芸の白眉と言うべきだろう。そして最後に、ブーツがノーラの人生をまとめる一言の重みと、聴衆に与える衝撃の効果が凄い。「お嬢さんは、ずっと後で、ある軍人と結婚して、インドで亡くなりました」。ブーツがその後で語り手に話したという次の逆説的で皮肉で警告的な締めくくりの言葉には余韻があって、この短編を第一級の深みのある作品にしている。

「まず第一に、結婚しようとしている男女の多くには、この二人の子供のような純粋さが半分もない。第二に、手遅れにならないうちに止められて、別々に連れ戻されることが出来れば、結婚しようとしている多くの男女にとって、それは多分とても良いことなのだろう」[28)]。

3. 「ドクター・マリゴールド」[29)]

前半は「語り芸」の面白さで笑わせ、後半は「弱者擁護」の人情話で感動させる。この喜劇と悲劇、滑稽と悲哀、ユーモアとセンチメンタルなメロドラマのバランスが実にいい理想的な朗読台本が、「ドクター・マリゴールド」である。ディケンズは、週間雑誌『一年中』の1865年クリスマス号に、「ドクター・マリゴールドの処方」と題して発表した短編小説を基に、主人公である大道商人の語り（モノローグ）を中心にした朗読台本を作成し、200回ものリハーサルを重ねた上で、親友のフォースターをはじめ、ブラウニング、ウィルキー・コリンズ、チャールズ・ケントといった著名人を前にした試演会で朗読して、大好評を博した。特に前半に朗読技術を必要とする台本は、俳優としてのディケンズが大向こうを唸らせてやろうという計算のもとに書いているただけに、練習すればするだけ「立板に水」のような語りの効果が上がるので、朗読に賭けた意気込みが、200回という異常な練習回数に伺える。

オックスフォードの全集版で38ページ、コリンズ版の朗読台本で19ページの短編は、朗読して約１時間、『ピクウィック・クラブ』からの短い一場面「ボブ・ソーヤー氏の独身者パーティ」の台本と組んで、1866年４月10日に、ロンドンのセント・ジェームズ・ホールで初演され、それ以後74回も朗読さ

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

れた。朗読回数では「ひいらぎ旅館のブーツ」の次にくる第4位の人気台本である。ディケンズの朗読を聞いたW.M.ライトは、「今夜、皆さんにドクター・マリゴールドの物語を朗読致しますのは、私の喜びとするところであります。この主人公にすべてを任せて、彼なりのやり方で皆さんに語ってもらいましょう」[30] と言って、ディケンズが朗読を始めたと記録している。ディケンズは、俳優として終始ドクター・マリゴールドに成り切って、朗読を進めたものと思われる。この「語り芸」の傑作台本は、タタキ売りの大道商人が、なぜ「ドクター・マリゴールド」と呼ばれるようになったかという名前の解説で始まる。この男の親父は「ウィラム・マリゴールド」。クイーンズ街道で赤ん坊が生まれそうになったとき、医者を呼んできた。その医者は親切な紳士で、お産に立ち合ったお礼に、貧乏な親父から紅茶のお盆しか受けとらなかったので、医者に敬意を表して、生まれた赤ん坊に「ドクター」(医者)という名前を付けたという。そのドクター・マリゴールドは成長してタタキ売りを商売にするようになるわけだが、そのタタキ売りの口上が、ユーモアたっぷりの実に愉快なスピーチで、そこには朗読の大家としてのディケンズばかりではなく、演説の大家とてのディケンズの面目が躍如としている。

この朗読台本が好評だった理由は、最初にタタキ売りの快活で面白いスピーチで笑わせておいて、その後にタタキ売りの可愛いい小娘ソフィーが病死しする哀れな場面と、娘や妻に死なれて孤独になった大道商人が、聾唖の少女を譲り受けて育てると、その娘は聾唖の青年と愛し合って中国へ渡ってしまい、5年後にドクター・マリゴールドのところへ戻って来たとき、二人の聾唖者の間に生まれた娘が、タタキ売りに「おじいちゃん」と言葉をかける感動のラスト・シーンが用意されているからだ。

ディケンズ文学の特色である弱者の立場からの発言と人情味、そしてユーモアとペイソス、笑いと涙のバランスが見事な短編であって、言葉の音楽的効果とディケンズ文学特有のテーマと思想が、魅力的な語り芸で統一されていて、朗読美学の一つの完成を見る思いがする。

4. 「バーボックス・ブラザーズ」[31]

1867年1月から始まる5か月間の長期公開朗読旅行に備えて、ディケンズは、週間雑誌『一年中』の1866年クリスマス号に、「マグビー・ジャンクション」[32] の総題で発表した「バーボックス・ブラザーズ」と「マグビー駅のボーイ」と「信号手」の3編を、新しく朗読のレパートリーに加えること

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

にした。そこでクリスマス・シーズンに、ギャッズヒルの邸宅において、一番長い「バーボックス・ブラザーズ」と、小品の「マグビー駅のボーイ」を、家族や招待客の前でプライベートに朗読して聞かせた。そして1867年1月15日、この2編の新しい台本によって、ディケンズは長期公開朗読の初日を飾ったのであった。ところが、それ以後この2編はあまり朗読される機会がなく、「バーボックス・ブラザーズ」は5回、「マグビー駅のボーイ」は8回、「信号手」はついに未朗読に終わった。

「バーボックス・ブラザーズ」は、「哀れな旅人」に似た物語で、傷心の放浪紳士が、貧しくて弱い人たちを助け、愛していた女性と駆落ちした友人の過去の裏切りをすべて許してやるという寛容とヒューマニズムの精神に満ちた物語である。オックスフォードの全集版では41ページ、コリンズ編の朗読台本は22ページに縮小されているが、語り手なしで、いきなり二人の男の対話で始まる演劇的な冒頭の部分は、原作通り台本でも生かされている。

ある寒い日の午前3時、マグビー・ジャンクション駅で、55歳位の「行く先が決まっていない放浪紳士」と、駅の荷物係のランプスという男の、二人だけの対話を最初にもってきた朗読効果が、いかにも演劇好きのディケンズらしく、まるで舞台劇か映画のシナリオのようなダイアローグは、観客や読者を物語の世界に巧みに引き込んでしまう。ディケンズの語り芸の優れた実例である。「愛の悲しみ」のテーマは、主人公の放浪紳士ジャクソンの失意の人生に描かれているが、この放浪紳士が駅の荷物係の娘で身体の不自由なフィービーや、彼を裏切った昔の女ビアトリスの娘ポリーに対して、優しく援助の手をさしのべる親切心が、センチメンタルだが美しい。

5. 「マグビー駅のボーイ」[33)]

「バーボックス・ブラザーズ」と組んで。1867年1月15日に初演された「マグビー駅のボーイ」は、その前年の1866年に、旅行中のディケンズが、ラグビー駅の軽食堂で、ひどいサービスに腹を立てた時の体験に基づいて書かれたユーモアに溢れた短編で、シーリアスでメロドラマティックな「バーボックス・ブラザーズ」と組み合わせた観客へのサービス精神と朗読効果への配慮は、さすがにディケンズである。オックスフォードの全集版は10ページ、コリンズ版の朗読台本では6ページに縮小されている。

この軽いスケッチ風の台本の魅力は、イズィキャルという少年になりすまして、マグビー駅の軽食堂で飲食物を買う様々な乗客たちや、そこで働く「おかみさん」を中心にした女たちを、鋭い観察眼で生き生きと活写する

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ディケンズのユーモラスなストーリー・テリングにある。そうは言っても、ストーリーはあって無いようなもので、入れ代わり立ち代わり軽食堂へ入ってくる国際色豊かな乗客たちと、彼らに応対する「おかみさん」たちの喜劇的な人物スケッチだけで、愉快な一編の短編を書いてしまうディケンズの創造力が冴えている。シェイクスピアはハムレットが旅役者に与える助言として、演劇は「言わば、自然に鏡をかかげるようなものだ」[34] と言っているが、この短編におけるアルバイトの小僧は、まさに語り手として、この「自然に鏡をかかげる」役目を果している。

性格描写が特に面白いのは、軽食堂の背後にあるカウンターで、ポマードのような髪油をぬる「おかみさん」で、客が来ると、「それケダモノがエサを貰いにやって来た」[35] とつぶやいて、古くなったパイを皿にのせて出すのだから、サービスも何もあったものではない。「おかみさん」がこうだから、この軽食堂で働く女たちも似たり寄ったりである。スニフ夫人は「おかみさん」の留守中に、ミルク・ティーをくれと言った客に、ミルクを入れずに出して文句を言われると、ミルクを入れないでくれと注文した客に出したミルク・ティーと、客同士で勝手に交換してくれと言うのだから、セルフ・サービスもいいところだ。こうした描写で聴衆を楽しませる軽いコメディ調の人物風刺は、貧しくて弱い少年の視点に立ったディケンズの語り芸の粋である。

6. 「小人のチョップス氏」[36]

ディケンズが「小人のチョップス氏」を公開朗読のレパートリーに入れようと考えたのは、1861年8月末のことだった。フォースターの『ディケンズ伝』に引用されている手紙には、次のようにある。「毎日、2時間から3時間、新しい朗読台本の練習をしている。そして自分の事務的な仕事を別にすれば、朗読練習のほかは何もしていない。『家庭の言葉』のクリスマス号の一つから取った『小人』がそうだ」。ディケンズが、この短編を発表したのは1858年で、原題は「貸家」、「社交界への登場」をテーマにしていて、初演は朗読練習を始めた時から7年後の1868年10月28日、リバプールにおける「さよなら公開朗読旅行」の期間中であった。その翌月にはロンドンで2回だけ朗読し、1870年のロンドンにおける「さよなら公開朗読会」でも2回だけ朗読した。朗読回数は、これらの5回だけで、最下位の『炉ばたのこおろぎ』の4回とともに、最も少ない部類に入る。オックスフォードの全集版では10ページ、コリンズ編の朗読台本では6ページである。

ディケンズの公開朗読研究の権威であるフィリップ・コリンズが述べてい

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

るように、登場人物が語るモノローグとしては、「ひいらぎ旅館のブーツ」にかなわないし、喜劇的挿話としては『ピクウィック・クラブ』のバーデル対ピクウィックの「裁判」場面や「ボブ・ソーヤー氏の独身者パーティ」の方が圧倒的に人気があった。しかし、これが愛すべき小品として優れていることには変わりなく、ディケンズの朗読を聞いたフランク・マージァルズは、「朗読者の声のトーンが今だに耳に残っている」[37] という記録を残しているし、名優エムリン・ウィリアムズは、ディケンズの扮装で行った評判の「ワンマン・リサイタル」で朗読して好評を博し、その記録を著作『ディケンズからの朗読』と、ＬＰレコード録音「エムリン・ウィリアムズのチャールズ・ディケンズ」（デッカ盤）[38] に残している。

興行師マグズマン氏が語るモノローグ形式で展開する「小人のチョップス氏」では、頭の大きい小人が、宝クジで大当たりをとって大金をつかみ、憧れていたロンドンのペル・メルの社交界に出るが、俗物どもにひどい扱いを受けた上に、大金をすっかり巻き上げられてしまい、悲しい最後を遂げる哀れなエピソードを通して、ディケンズ一流の貧しい者や弱い者の純粋な心の美しさに対する深い理解と、俗物根性に対する鋭い批判精神が、悲喜こもごもの小品を、感動的な美しい芸術作品に昇華している。

第Ⅲ章　長編小説の名場面と抜粋

1. 「かわいいドンビーの物語」[39]

プロフェッショナルな朗読家して、後半生の新しいスタートを切ったディケンズが、『クリスマス物語集』の中の３編の朗読に続いて、初めて試みた長編小説からの抜粋朗読が、「かわいいドンビーの物語」であった。初演は1858年６月10日で、それ以来ディケンズは、この哀れな子どもの話を、48回も朗読した。朗読台本の基になった『ドンビー父子』[40] は、1846年10月から月間分冊で書き始められ、1848年に完結した長編小説で、オックスフォードの全集版で878ページある。内容は、父親から引き継いだ大会社の社長であるドンビー氏の野心と、後継者となるべき息子に対する過大な期待のために、息子は早死にし、自らも破産して病気になる「夢と挫折」の悲惨な物語である。

朗読台本は、この長編の約４分の１位にあたる第１章から第16章まで、すなわち、48歳のドンビー氏の期待を担った赤ん坊が誕生して48分たったところから始まって、その子が病弱なために死亡するまでの部分を、６章構成に

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

まとめている。第1章は原作の第1章、第2章は原作の第5章、第3章は原作の第8章、第4章は原作の第11章と第12章、第5章は原作の第14章、第6章は原作の第16章に、それぞれ相当するわけだが、やがてレパートリーに入れるようになると、第2章の息子ポールの洗礼の場面をカットした5章構成にして、軽い短編をもう一本加えて、一晩のプログラムを組むようになった。コリンズ編の朗読台本では24ページ、『鐘の音』とほぼ同じ長さの抜粋台本だけでは、余りにもシーリアスで、哀れで、悲しすぎると考えたのであろう。

原作同様、作者が語り手となって展開する朗読台本には、原作と同じドンビー父子のダイアローグが挿入してあって、それが聞き所になっている。分娩と同時に母親が死んでしまったため、母を知らない哀れなポールが、父親のドンビー氏と交わす無邪気な会話は涙を誘う。特に最後のポールのセリフは、『オリヴァー・トゥイスト』第2章の忘れられない名セリフ「お願いです、もっと欲しいんです」[41] と共に、ダイアローグの名手としての劇作家ディケンズの面目が躍如としている。

「パパ、お金って、なに？」

「金や銀や銅。ギニーやシリングやハーフ・ペンス。どれも知ってるだろう？」

「うん、それは知ってるよ。そのことじゃなくてね、パパ。僕が知りたいのは、お金って、けっきょく、何なの？」

「お金が結局どうだというんだ！」

「僕が聞いてるのはね、パパ、お金で何が出来るの？」

「そのうちに、よく分かるようになる。お金があれば、ポール、何でも出来る」

「お金は残酷じゃない、そうでしょう？」

「とんでもない。良いものは残酷でありえない」

「パパは大金もちで、お金で何でも出来る。お金が残酷でないのなら、どうしてお金でママの命を助けることが出来ないのかなあ」[42]

2. 「ミセス・ギャンプ」[43]

1858年6月17日、ディケンズは喜劇的短編「ミセス・ギャンプ」を初演し、公開朗読のレパートリーに入れた。ミセス・ギャンプは、作者が1843年から1844年にかけて、月間分冊で発表した長編小説『マーティン・チャズルウィット』[44] に登場する品のない特異な性格の大女で、職業は「乳母」で「産婆」ということになっている太った酒好きの老女だが、どことなくいか

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

がわしいところがあって、若い頃から商売女でも何でもやって、たくましく生きてきた「よろず引き受け業」の「お手伝いさん」である。紳士淑女が忌み嫌う仕事に従事している下層階級の貧しい女であるため、上品な淑女や批評家に不評だったが、ディケンズお気にいりのキャラクターの一人で、60回も朗読した。朗読回数では第７位の人気台本である。

ミセス・ギャンプは、登場場面の少ない脇役で、死体の納棺や病人の看護を引き受けているが、一度でもこの小説を読んだことのある人にとっては、忘れられない強烈な個性の持主で、作品を離れても、イギリス文学や文化を代表する人気者になっている。このタイプの喜劇的な女性には、古くはチョーサーの「バースの女房」[45]がいたし、シェイクスピアには『ロミオとジュリエット』の乳母[46]や『ヘンリー四世』のクイックリー[47]、そしてシェリダンの『恋敵』のマラプロップ夫人[48]がいるが、ミセス・ギャンプはディケンズのユーモアが創造したフォルスタッフの女性版で、最も有名な作中人物の一人である。

朗読台本の構成は、ミセス・ギャンプが初めて登場する第19章と、次の登場場面である第25章を中心にしていたが、長くて起伏に乏しいので、朗読会を重ねるうちに、第25章を思い切って省略し、この老女がペックスニフ氏に頼まれて、アンソニー・チャズルウィット老人の死体納棺に出掛ける第19章に絞って朗読し、人気を博した。オックスフォードの全集版では16ページ、コリンズ版の朗読台本では９ページの短い台本で、その特色は筋の面白さではなく、あくまでもミセス・ギャンプの語り口にある。コクニー訛りの独特の英語を、ハスキーな声で、ゆっくりとしゃべる語りの文体と語法は、「ギャンピズム」として知られ、マラプロップ夫人の「マラプロピズム」[49]とともに、特異な英語表現として英和辞典に紹介されている。俳優朗読家としてのディケンズの朗読芸が十二分に発揮出来るように工夫された台本である。

3. 「バーデルとピクウィック」[50]

ディケンズは、1834年に「ボズ」というペン・ネームで新聞や雑誌に連載し始めた短編を、1836年に『ボズのスケッチ集』[51]としてまとめて出版し、ユーモア作家としての片鱗を見せたのち、24歳の誕生日を迎えて間もなく、毎月２章か３章ずつの連載小説として書き始めたのが『ピクウィック・クラブ』であった。1836年３月31日から１冊１シリングの月間分冊で出版され、1837年11月まで20号も続いて、小説家としてのディケンズの名声が確立した。

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ディケンズは、この初期の代表作から、最も面白い場面を２つ選んで、喜劇的な２本の短い朗読台本を作成し、いずれも公開朗読して人気を博した。

『ピクウィック・クラブ』の人気の秘密は、何といっても主人公のピクウィックにある。「人類の礼讃が自分の活動範囲であり、博愛の精神がその裏打ちの保障になっている」（第１章）ピクウィックは、「人間性を観察している」（第２章）はげ頭に丸い眼鏡の雄弁な人生詩人であり「哲学者」（第10章）である。彼の先輩にはセルバンテスのドン・キホーテや、シェイクスピアのフォルスタッフのような喜劇的巨人がいるし、後輩には喜劇王チャップリンがいる。

「バーデルとピクウィック」は、『ピクウィック・クラブ』の第34章を、ほとんどそのまま朗読台本にしていて、オックスフォードの全集版では25ページ、コリンズ版の朗読台本では12ページである。この裁判の場面には、読者も観客も、そして作者自身も、その庶民性と人情味と諧謔性の故に愛しているピクウィック・クラブの会長ピクウィックと、その仲間のタップマン、スノッドグラス、ウィンクル、そして第10章から登場した従者のサム・ウェラーや小男の弁護士パーカーが賑やかに登場するが、焦点はイギリスの法律と裁判制度に対する痛烈な風刺にあって、裁判の不条理性が嘲笑の対象になっている。最大の風刺は、雄弁な弁護演説の不条理性で、弁護士事務所に務め、議会や民法法廷の速記者としての経験があるディケンズならではの、そして演説の大家でもあったディケンズ特有の、言葉のレトリックと内容の空虚な雄弁術に対する辛辣な批判が、ハイ・コメディの笑いを誘う。この台本では、語りの効果というよりも、スピーチの効果が有効に働いて、見事な喜劇的場面を創造している

この朗読台本の初演は、1858年10月19日で、それ以来の朗読回数は『クリスマス・キャロル』を遥かに凌ぐ167回の最高記録である。

4. 「デイヴィッド・コパフィールド」[52)]

ディケンズ文学のエッセンスと魅力の殆どすべてが、ぎっしりと詰め込まれている自叙伝的長編小説『デイヴィッド・コパフィールド』（1849－1850）は、作者の37歳から38歳にかけて、月間分冊として刊行された代表作で、見事なストーリー・テリングの妙味によって、小説を読む楽しみと醍醐味を満喫させてくれる。ディケンズが、オックスフォードの全集版で877ページもある膨大な長編を抜粋版で初めて公開朗読したのは、1861年10月28日のことで、それ以来、約２時間の台本と、それより30分も短縮した１時間半の台本

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

によって、71回も朗読した。朗読回数では第５位を占めている評判の台本である。

ディケンズが構成した朗読台本の中核をなしているのは、幼なじみのエミリーをめぐるデイヴィッドとハムとスティアフォースの愛と友情のドラマで、この美しく悲壮な筋を締めくくるのが、ラストの迫力ある大嵐の場面である。その間には、デイヴィッドのドーラに対する熱愛と、ミコーバーの借金を苦にしないで生き抜く楽天的な生き方が、巧妙に織り込まれている。約２時間の台本としては、実に欲張った構成だが、どのエピソードもディケンズにとっては、愛着と思い入れがあって、省略できなかったようだ。それだけに、それぞれの印象深い物語は、省略台本では、どれも物足りない感じを拭いきれない。特に、貧乏のどん底からのユーモアが最高の効果を発揮していて、ディケンズの父親を思わせるミコーバーの登場する場面は、もっとあってもいい。いつも「なんとかなる」と言って、厳しい現実を楽天的に生き抜くミコーバーの人生観は、「歳月、人を待たず。今日出来ることは、決して明日に延ばすな。引き延ばしは時間の盗人、盗人はつかまえておけ」[53] という言葉に表明されている。こういう人生を達観した愉快な人物がいる限り、世の中は安泰で、希望がもてる。

原作の全64章から、この小説の読みどころとして、ディケンズ自身が選んだ部分を６章に再構成した台本は、コリンズ版では30ページで、その内容は次の通り。

第１章　デイヴィッドとエミリーの幼い頃の純愛と、スティアフォースへの友情。（原作の第３章、19章、20章、21章、22章、29章）

第２章　エミリーとハムの婚約と、エミリーとスティアフォースの駆落ち。（原作の第31章）

第３章　デイヴィッドのドーラへの熱愛と、ミコーバー氏の楽天的な人生観。（原作の第16章、26章、27章、28章、36章）

第４章　ミスター・ペゴティのエミリー捜索の旅。（原作の第32章と40章）

第５章　デイヴィッドのドーラに対する求婚と結婚、そしてドーラの病死。（原作の第33章、37章、41章、43章、44章、48章）

第６章　ヤーマスの海の大嵐と、ハムとスティアフォースの死。（原作の第50章、51章、55章）

これにデイヴィッドのアグネスに対する敬愛の筋を加えると、原作の根幹

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

をなす題材はほぼ出揃うわけだが、それでなくても2時間以上はかかる台本なので、ディケンズはアグネスのエピソードを割愛している。魅力的な人物の中では、ペゴティやミス・ベッチーやミスター・ディックなどに、もっと登場の場を与えたいが、これもディケンズは極力省略している。しかし、貧しく弱い人々への思いやり、愛の喜びと悲しみ、友情の美しさと裏切り、純心な愛、献身と努力と寛容の美徳、許し、そしてユーモアなど、ディケンズ文学の本質やテーマや特色が、殆どこの省略台本に包含されている代表作と言えよう。

5. 「ニコラス・ニクルビー」[54)]

『ニコラス・ニクルビー』は、ディケンズが26歳のとき、『オリヴァー・トゥイスト』に続いて、1838年4月から月間分冊で連載を始め、1839年10月に完結した長編小説で、若い表題の主人公の遍歴と冒険の物語である。とりわけ三流どころのドサ回り劇団を描くクラムルズのエピソードは、演劇志向だった若い頃の作者自身の体験が反映されている芝居賛歌の「演劇小説」になっていて、シェイクスピアについての対話も出てくる。J. B. プリーストリーが文名を確立した長編小説で、劇化して成功した『友達座』(1929)[55)]に影響を与え、最近ではロイアル・シェイクスピア劇団が長時間ドラマとして劇化して評判をとった。

ディケンズが公開朗読の台本に選んだのは、オックスフォードの全集版で831ページもある長編の最初の部分にあたる「ヨークシア・スクール」の場面で、コリンズ版の台本では25ページ、4部構成になっている。第1部は第7章が中心で、第3章と第4章と第5章の短文の抜粋からなっている。第2部と第3部は、それぞれ第8章と第9章に呼応している。第4部は第12章と第13章に、第63章からの短文を加えて構成している。ディケンズが実際にヨークシアを訪れて、貧しい寄宿生徒を虐待する悪名高き学校に取材して書いたというだけあって、陰惨で哀れな学校の場面の迫真の描写には臨場感がある。暴力教師スクィアーズと無慈悲な妻のミセズ・スクィアーズの強烈な性格描写には戦慄させられるが、感動的なのは、この学校というよりは私塾に、助手として応募した主人公のニクルビーと、彼を頼りにする19歳の青年スマイクの暖かい人間関係である。原作同様に作者が語り手の台本は、この二人がヨークシア・スクールを逃げ出すところで終わる。

ディケンズが、この台本を朗読のレパートリーに入れたのは、1861年10月29日で、それ以来、54回も朗読した。ドラマティックで迫力があり、悲哀感

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

が漂うので、聴衆に歓迎された。朗読台本は2種あって、短い3部構成の方は、スクィアーズの娘のファニーがニコラスに思いを寄せてティー・パーティを開く喜劇的な第3部（原作の第9章）をカットしている。この省略版は、「ボブ・ソーヤー」や「ひいらぎ旅館のブーツ」と組んだ3本立てのプログラムとして朗読された。1時間15分の4部構成版は、「バーデルとピクウィック」と組んで朗読されたほか、「ボブ・ソーヤー」や「ひいらぎ旅館のブーツ」と組むこともあった。3部構成の短縮版には、コミカルな息抜きの場面はないが、筋立てがすっきりしていて、朗読台本としては優れている。ディケンズの社会悪に対する正義感と、弱い人々に対する同情が真っ正面から力強く表現されていて、若々しい情熱が漲っている作品である。

6. 「ボブ・ソーヤー氏のパーティ」[56)]

「ボブ・ソーヤー氏のパーティ」は、『ピクウィック・クラブ』の第32章に基づく朗読台本で、全集版では14ページ、コリンズ版の台本では10ページ、少し省略と改訂があるだけで、ほとんど原作のままである。初演は1861年12月30日、それ以来の朗読回数は64回で、第6位である。

『ピクウィック・クラブ』全編を支配しているのは、ピクウィック氏の愛すべき個性と、それが醸し出すユーモアとペーソスであるが、短編の連作でありエピソードの積み重ねから成っているこの長編には、どの場面にも読者を楽しませる特異な人物たちが配してある。「ボブ・ソーヤー氏のパーティ」では、「僅かばかりの勘定書」をわいわいわめいて取り立てる意地の悪いラドルのおかみさんの性格描写、「大きな木製の玉で作ったありきたりのネックレース」と子供の小話、そしてノッディー氏とガンター氏の「紛争」と和解のエピソードなどが、ディケンズならではのストーリー・テリングとユーモアの感覚で、巧妙に語られていく。そして、ボブ・ソーヤー氏の下宿で開かれた独身者のパーティに招かれて、様々な出来事に直面して当惑するピクウィック氏と、パーティの主催者であるボブ・ソーヤー氏にも、どことなくユーモアとペーソスが漂う。

ユーモアとは何か？ティケンズのユーモアとは？その回答は、議論や論証で出るものではなくて、『デイヴィッド・コパフィールド』のミコーバー氏[57)]に付き合うか、この「ボブ・ソーヤー氏のパーティ」を味読してみることである。ユーモアはウィットと違って、ある特異な人物の醸し出す独特の雰囲気と、その「おかしみ」を感じる心にあるからだ。ディケンズは、特異な人物たちの性格創造と、滑稽な状況設定と、優れた劇作家のセリフ術と、

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

鋭くてリアルなカメラ・アイのような描写力、そして持前の語り芸の力を駆使して、読者にユーモアを感じさせる雰囲気を醸成することに成功している。

7. 「サイクスとナンシー」[58)]

ディケンズが『オリヴァー・トゥイスト』(1837－1839)の「ナンシー殺し」の場面の朗読を考えたのは1863年頃だが、「サイクスとナンシー」を自作朗読のレパートリーに入れる気になったのは1868年の秋で、初演は1869年1月5日、ロンドンのセイント・ジェームズ・ホールにおける「さよなら朗読会」であった。それから最終朗読となった1870年3月15日の公演の寸前まで、短期間のうちに28回も朗読した。それから3か月後の6月9日に、ディケンズは58歳の生涯を閉じたので、この大変な朗読が命取りになったと言われている。

ディケンズが残した21編の朗読台本の中で、最もドラマティックで、センセーショナルで、強烈なのが、「サイクスとナンシー」である。コリンズ版で15ページの台本を効果的に朗読するには、演技力とエネルギー、変化に富んだ迫力のある声の力とスタミナが必要になる。それだけに、この作品の朗読にまつわる逸話も多い。ビル・サイクスがナンシーを殺害する血生臭い場面の朗読を聞いた聴衆はショックを受け、失神した女性が出たという話や、朗読するたびにディケンズの血圧が上がってドクター・ストップがかかったとか、命を縮める原因の一つになったとか言う話である。

『サイクスとナンシー』の朗読台本は、『オリヴァー・トゥイスト』のラスト・シーンに近い第43章、44章、45章、46章、48章の各章を中心に構成されている。表題の主人公が登場しない、言わば脇筋だが、読者や聴衆に鮮烈な印象を与える残酷で強烈な場面の連続で、緊張感と迫力を出すには、卓越した語り芸が必要になる。したがって、小説家としてヴィクトリア朝を代表する大家となったディケンズは、生涯の最後に、子供の頃からの夢であった舞台に立ち、持前の俳優としての才能のすべてを燃焼させて見せたのが、「サイクスとナンシー」の公開朗読であった。

第Ⅳ章　未朗読台本

1. 「憑かれた男」[59)]

『憑かれた男』は、ディケンズの『クリスマス物語集』に収められている中編小説で、1848年に発表された。ディケンズは、その年の12月11日に、自宅で友人たちに非公開で朗読して聞かせたという。1853年12月下旬、バーミ

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ンガムで最初の慈善公開朗読会を開催することになったとき、ディケンズは『クリスマス・キャロル』のほかに、『鐘の音』と『憑かれた男』を候補作品にあげたが、主催者の意向もあって、そのときは『クリスマス・キャロル』と『鐘の音』だけの朗読に終わった。その後ディケンズは1858年から始まった有料公開朗読会のレパートリーに入れるつもりで、何度も台本作成を試みたが、どうしても満足のいく結果が得られず、ついに未朗読に終わってしまった。

オックスフォードの全集版で82ページもある『憑かれた男』は、「授けられた贈り物」、「行き渡った贈り物」、「取り消された贈り物」の3章から成っている「過去の不幸な亡霊」に取り憑かれた化学者の幻想的な物語で、各章がほぼ同じ長さで書かれている。ディケンズが得意とした演劇的なダイアローグを駆使したドラマティックな人物造形と写実的な情景描写よりも、詩的で幻想的な文章が多く、そのあたりに朗読台本に脚色しにくかった原因があるようだ。

ディケンズが削除に苦心して構成したコリンズ版で21ページの朗読台本は、作者が語る表題の「憑かれた男」である化学者レドローの性格描写と、この過去に取り憑かれた男の運命に焦点を絞ったため、第1章は原作を少しカットするだけで済んだが、第2章はテタビィの家庭の描写を大幅に削除することになり、第3章に至っては最初のページだけを結びとして使ったにすぎない。この作品には、『ハムレット』の1幕2場の最初にあるクローディアスのセリフ、「記憶は生々しく」[60] に基づく「主よ、我が記憶をいつも生々しく」[61] が何度も出て来るので、父の亡霊という過去の幻影に「憑かれた男」ハムレットの悲劇を、ディケンズは意識していたようだ。シェイクスピア悲劇のような神秘性と内容の暗さに加えて、朗読時間の制限もあって、この中編小説の朗読台本作成に、ディケンズは必ずしも成功しているとは言えない。公開朗読を一度もしなかったのは、朗読効果に自信がなかったからだろう。

2. 「バスティーユの囚人」[62]

ディケンズが、公開朗読の台本として用意した「バスティーユの囚人」は、全集版で358ページある『二都物語』(1859) の第1巻「よみがえった」[63] の中の第4章、5章、6章の3章を基に構成されている。この有名な歴史小説の発端に当たる部分のみで、コリンズ版の朗読台本では14ページである。ディケンズは、この台本を1861年の夏に準備したが、一度も朗読する機会がなかった。

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

「それはおよそ善き時代でもあれば、およそ悪しき時代でもあった。知恵の時代であるとともに、愚痴の時代でもあった。信念の時代でもあれば、不信の時代でもあった。光明の時でもあれば、暗黒の時でもあった。希望の春でもあれば、絶望の冬でもあった。前途はすべて洋々たる希望にあふれているようでもあれば、また前途はいっさい暗黒、虚無とも見えた。人々は真一文字に天国に向っているかのようでもあれば、また一路その逆を歩んでいるかのようにも見えた――要するに、すべてはあまりにも現代に似ていたのだ」[64]。この名高い『二都物語』の書き出しの語りで始まる朗読台本は、ドーバーのロイアル・ジョージ・ホテルにおけるミスター・ロリーとミス・マネットの出会いを経て、パリのサン・タントアーヌの屋根裏部屋での、ミス・マネットの父である囚人「北塔105番」と娘の感激の対面に至る。比較的地味で、淡々とした描写の多い台本だが、ミスター・ロリーやミス・マネットが、それぞれの思い出を語る部分の話術が、朗読の聞かせどころである。そして18年の幽閉生活で憔悴しきった「北塔105番」の老靴職人の「吐息とも、うめきともつかない、おっくうそうな声」の表現には、プロの朗読技術が必要になる。朗読効果のある魅力的な台本だ。

この朗読台本の終わったところから、パリとロンドンの二都を舞台に、美しい女性ミス・マネットを巡って、フランスの貴族チャールズ・ダーニーと、彼と瓜二つである放蕩無頼の弁護士シドニー・カートンとの、波乱に満ちた華麗な恋愛合戦が展開していく。ミス・マネットが愛しているダーニーの身代わりになって、断頭台に登るシドニー・カートンの犠牲的精神の輝きと、有名な最後の言葉は、1935年と1958年の映画化作品では生かされていたが、朗読台本では、作者自身ですら残念ながら生かす余地がなかった。

「いま僕のしようとしている行動は、今まで僕のした何よりも、はるかに立派な行動であるはず。そしてやがて僕のかち得る憩いこそは、これまでの僕の知るいかなる憩いよりも、はるかに美しいものであるはずだ」（第3巻第15章の結び）[65]

3. 「大いなる遺産」[66]

ディケンズの自叙伝的大作『デイヴィッド・コパフィールド』と双璧をなす芸術的完成度の高い長編小説の傑作『大いなる遺産』が、週間雑誌『一年中』に連載されたのは、1860年12月から1861年6月にかけての7か月間であった。ディケンズは、この作品が完成した年の10月28日から始まる公開朗読旅行のプログラムに「大いなる遺産」を加えようとしたらしいが、結局は

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

実現せず、生涯一度も朗読する機会もなく、全集版で460ページある原作が、コリンズ版で57ページの朗読台本に短縮されて残っている。

朗読台本の骨子となっているのは、語り手の主人公ピップと脱獄囚マグウィッチとの、ミステリーに包まれたドラマティックで宿命的な関係で、3部構成になっている。

第1ステージは、「ピップの少年時代」で、荒涼とした沼地での脱獄囚マグウィッチとの運命的な出会いと、鍛冶屋のジョー・ガージャリー夫婦の家での暮らしが中心である。原作の第1章から第7章までに当たる。

第2ステージは、「ピップの未成年時代」で、ミス・ハヴィシャムに代表される上流社会を知ったピップに、「大いなる期待」が待っていたエピソードが中心で、原作の第8章から第13章、そして第37章までの各章から、ピップの成長過程が飛び飛びに拾われている。

第3ステージは、「ピップの成年時代」で、ロンドンで紳士教育を受けたピップの前に、脱獄囚マグウィッチが再び姿を現わしてから、逮捕されて監獄で重体になり、ピップに見守られて死ぬまでの物語である。原作の第39章から第56章までである。

ピップとエステラの関係や、ビディなども削除されていて、原作の内容の一部分しか台本にはないが、ピップとマグウィッチの関係は大体たどれていて、脱獄囚の人生の空虚さと、心の美しさが、ディケンズの見事な語り口で、読者や聴衆の胸を打つ。特に、脱獄囚の臨終の言葉は、強靭な精神力で暗い人生を生き抜いた人間から発した一条の光のメッセージだ。ピップとマグウィッチの最後の対話は、次の通り。

「今日はひどく苦しいんでしょう？」

「俺はな、いいか、けっして愚痴を言わんのだ」

「けっして愚痴をこぼしませんね」[67]

4. 「リリパー夫人の貸間」[68]

「リリパー夫人の貸間」は、ディケンズ自身が編集していた週間雑誌『一年中』の1863年クリスマス号に発表されて好評を博したので、翌年のクリスマス号に続編である「リリパー夫人の遺産」[69]が書かれた。2作品とも、今では『クリスマス短編集』に収録されていて、オックスフォードの全集版で「貸間」の方は33ページ、「遺産」の方は28ページである。朗読台本に再編集した正確な時期は不明だが、「ドクター・マリゴールド」の台本制作とほぼ同じころ、すなわち1865年の後半から1866年の前半にかけてであろうと推定

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

されている。

物語の語り手であるリリパー夫人は、結婚して2年後に夫に死なれてからは、ロンドンのストランドで貸間によって生計を立てて約38年、60歳前後の話し好きで人情味のある女性で、ミセス・ギャンプやミセス・ニクルビーなどと共に、ディケンズが創造した人気のある代表的な女性像である。この夫人の下宿に住みついているのが「メイジャー」（少佐）と呼ばれる退役軍人で、ユーモアと人情味のある好人物だ。ディケンズの朗読台本は、「リリパー夫人の貸間」を半分以上カットして、それに「リリパー夫人の遺産」の一部分を加えて、幾つかのエピソードを中心に物語を構成している。コリンズ版の朗読台本では、18ページである。

最初は、リリパー夫人の自己紹介で、次は手に負えない2人の若い女中ソフィーとキャロラインについての愉快な描写、それから「メイジャー」の通称で活躍するジェミー・ジャックマンの登場、その後へ「リリパー夫人の遺産」からバフル氏一家の火事騒動と「メイジャー」の奮闘のドタバタ騒ぎが加えてある。最後は、貸間へ来た新婚夫婦の夫が、妊娠した妻を捨てて姿をくらまし、絶望した妻が身投げ自殺をしょうとしたところを夫人と少佐に救われ、その後で男の子を出産したものの病死、孤児となった子供をリリパー夫人と「メイジャー」が養育するという人情話で締めくくる。

ディケンズは、この台本を、ついに一度も公開朗読しなかった。語り手が女性である上に、関連性のないエピソードをつなぎ合わせた台本には、聴衆を最後まで引っ張って行く一貫性のあるドラマティックな構成力と迫力と魅力に欠けていると判断したからかも知れない。

5. 「信号手」[70)]

「信号手」は、週間雑誌『一年中』の1866年クリスマス号に発表された。のちに「マグビー・ジャンクション」の総題をもつ4章から成る物語の最終章として『クリスマス短編集』に収録された。オックスフォードの全集版では13ページ、コリンズの朗読台本では10ページで、ディケンズは殆ど省略なしで朗読するつもりだったようだが、公開朗読会では一度も取りあげなかった。この短編は、「不吉な予感を描いた最高傑作」と言われ、「恐怖を扱ったディケンズの熟練ぶり」が示されている「無気味な小品」であって、心霊術にも関係がある「超自然的幽霊話」でもある。

「信号手」は、音声効果が抜群の朗読台本でもあって、開口一番「おーい！そこの下にいる人！」で始まるスリル満点のミステリー・ドラマは、ま

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

るでヒッチコック映画を見ているようだ。事実、「信号手」は、1937年にアメリカでラジオ・ドラマ化され、1953年には短編テレビ映画になった。そのプロデューサーであり監督でもあったネイサン・ザッカーは、ディケンズの原作のナレーションの文をカットするだけで、ストーリーの展開とダイアローグは、そのままシナリオとして使用した[71]。このことは、ディケンズの朗読台本や原作小説の会話文は、舞台劇や映画やテレビ・ドラマのダイアローグとしてそのまま使えるし、写実的な地の文はカメラの役目を果していることの証明になっている。ディケンズは、大小説家であったばかりか、優れた劇作家と映画作家の才能を兼備し、しかも俳優と朗読家の芸があったので、このような語り芸を生かした完璧なまでの台本が書けたし、脚色も出来たのである。

終章　朗読台本の評価

1.　ディケンズ時代の評価

ディケンズの公開朗読の台本は、ディケンズ自身が、時代を代表する名士の小説家として発表した作品を、劇作家や脚色者としての才能を使って再構成し、俳優や演説家としての演技力や話術を駆使した語り芸の粋を生かして、プロフェッショナルナ朗読者として、聴衆のための有料朗読会で、唯一人自力で自作朗読をやってのけた一世一代の公演記録であった。今日のように、レコードやフィルムやテープやビデオの記録が無く、また一般聴衆や批評家の僅かな記録もパフォーマンスの全貌を伝え残してはいないし、また全貌の記録は期待すべくも無いので、聴衆やマネージャーの要望に答えて、ディケンズが自分の判断で実行した朗読会の回数を、当時の評価と考えたい。

21編の朗読台本のうち、５編は未朗読に終わったが、あとの16編の台本の中で、最高の朗読回数を誇っているのは、『ピクウィック・クラブ』から選んだ「バーデルとピクウィック」の「裁判」の場面で、164回である。第２位は『クリスマス・キャロル』の127回で、この２本が代表作だということになる。第３位は「ひいらぎ旅館のブーツ」で81回、第４位は「ドクター・マリゴールド」の74回、第５位は『デイヴィッド・コパフィールド』の71回、第６位は「ボブ・ソーヤー氏のパーティ」の64回、第７位は「ミセス・ギャンプ」の60回で、以上がベスト７である。第８位は「ニコラス・ニクルビー」の54回、第９位は「かわいいドンビーの物語」で48回、第10位は「哀れな旅人」の30回、そして第11位は「サイクスとナンシー」の28回、あとは

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

10回以下である[72]。

ただし、「サイクスとナンシー」が公開朗読のレパートリーに入ったのは1869年1月5日、この台本を最後に朗読したのが1870年3月8日で、亡くなる3か月前だったことを考えると、28回という朗読回数は非常に多いことになる。

2. エムリン・ウィリアムズの評価

ウェルズ出身のエムリン・ウィリアムズ（1905－1987）[73]は、俳優としても、劇作家としても、ロンドンとニューヨークの舞台で成功したが、映画俳優としてもスクリーンで名演技を見せ、映画演劇界のスター的存在だった。そのウィリアムズが、ディケンズと詩人ディラン・トマス[74]の「ソロ・パフォーマンス」（一人芝居）を創案し、自らディケンズやディラン・トマスに扮して、ロンドンやブロードウェイの舞台はもとより、世界の主要都市を巡演して一世を風靡したことがあった。

エムリン・ウィリアムズが目をつけたのは、偉大な小説家としてのディケンズではなくて、朗読家として晩年に成功したディケンズ像であって、ディケンズと同じ様に作家であり俳優であるという利点と特技を生かして、「世界的に有名な小説や物語からの名場面を演じるチャールズ・ディケンズ」[75]に扮した一人芝居を、1951年10月から始め、ディケンズ没後100年の記念すべき年には、この「当たり狂言」を再演して世界を巡演した。来日公演は1965年6月に実現し、21日から3日間、午後6時半から東京・有楽町の朝日講堂において上演した。

エムリン・ウイリアムズの「ディケンズ・リサイタル」のレパートリーは、ディケンズの朗読台本の再演、現在の観客を考慮した改訂版の上演、そしてディケンズの台本がない原作小説に基づく独自のアダプテーションの3種である。ここでは、彼のディケンズの台本評価として、再演と改訂版を取り上げてみたい。彼のディケンズ朗読の基本方針は、ディケンズを全く読んでいない観客や、読んだことがあっても忘れている観客に向かって朗読するという姿勢である。したがって、ディケンズの台本を再演するにしても、観客の立場を考えて、分かり易さを目標にしている。例えば、ディケンズの時代に最高の朗読回数を記録した「バーデルとピクウィック」の場合には、第34章の「裁判」の場面の前に、第12章を加えて、事件の発端を観客に知らせるサーヴィスをしている。エムリン・ウイリアムズがリサイタルで取り上げた台本には、「ボブ・ソーヤー氏のパーティ」、「小人のチョップス氏」、「かわ

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

いいドンビーの物語」があるが、最大の評価は、ディケンズの未朗読台本「信号手」を、ほとんど台本通りに朗読して、その朗読を成功させたことであろう。

エムリン・ウィリアムズは、ディケンズを演じた体験を『ディケンズからの朗読』(1953)[76] と題する本に書き残しているほか、ディケンズの朗読に関する小論[77] も発表している。

3. フィリップ・コリンズの評価

現代イギリスの最も代表的なディケンズ学者であるレスター大学のフィリップ・コリンズ教授は、ディケンズ研究で数々の重要な業績をあげているが、特に注目すべきは、ディケンズが残した21編の公開朗読台本を集大成した労作『チャールズ・ディケンズ公開朗読台本全集」を、1975年にオックスフォードから出版したことである。この本によって、「もう一つのディケンズ像」である晩年の公開朗読家してのディケンズの全貌が、初めて明らかにされたと言っていい。朗読家としてのディケンズ像再評価の役目を見事に果している。

次の業績は、この全集の21編の朗読台本から、朗読回数の多かった12編を選んで、オックスフォード版「ワールド・クラシックス」シリーズの1冊[78] として、ペーパーバックの普及版で1983年に出版したことである。この本の出版によって、ディケンズの公開朗読台本が、文学作品として、新しい読物として、世界のディケンズ愛読者に提供されるようになった業績は、高く評価されてもいい。この本は、膨大な量のディケンズ文学への具体的で実際的な入門書としての役割を、立派に果している。

コリンズ教授の朗読台本評価の中で特筆すべきは、ディケンズが亡くなる寸前まで心血を注ぎ、命をかけて朗読した「サイクスとナンシー」を、朗読回数よりも、思想やテーマや深遠な内容よりも、朗読台本としての優れた効果と演劇性と強烈な性格描写の面から評価して、12編の朗読台本を代表する標題作品として際立たせたことだと言えよう。

4. 日本の評価

フィリップ・コリンズ編の『ディケンズ公開朗読台本全集』に収録されている21編の作品の中で、1995年現在で邦訳のあるのは、次にあげる諸作品で、日本語に翻訳されるということ自体が、日本におけるディケンズ文学の一つの評価である。『クリスマス・キャロル』(小池滋訳)と『鐘の音』(松村昌家訳)は、ちくま文庫の『クリスマス・ブックス』(1991年初版)に入っ

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ている。『炉ばたのこおろぎ』（村岡花子訳）は、かつて新潮文庫に入っていた。『憑かれた男』（藤本隆康、篠田明夫、志鷹道明訳）は、あぽろん社版（1982年初版）がある。『ドンベイ父子』（小松原茂雄訳）は、かつて三笠書房から出版された。『マーティン・チャズルウィット』（北川悌二訳）は、ちくま文庫（1993年初版）、『ピクウィック・クラブ』（北川悌二訳）も、ちくま文庫（1990年初版）に入っている。『デイヴィッド・コパフィールド』（中野好夫訳）は、新潮文庫（1967年初版）で出版されている。『ニコラス・ニクルビー』は、かつて『善神と魔神と』（菊池武一訳）という題名で最初の部分が角川文庫（1953年初版）に入っていた。『オリヴァー・トゥイスト』（小池滋訳）は、ちくま文庫（1990年初版）で出版されている。『二都物語』（中野好夫訳）は、新潮文庫（1967年初版）で入手出来る。『大いなる遺産』（山西英一訳）は、新潮文庫（1951年初版）に入っている。「信号手」（小池滋訳）は、岩波文庫の『ディケンズ短編集』（1986年初版）に収録されている[79)]。

これらの翻訳によって日本に受容されたディケンズ作品の中で、最も演劇的な『クリスマス・キャロル』は、1991年のクリスマス・シーズンに、劇団昴が松本永美子訳・菊池准演出で初演し、それ以後クリスマス・シーズンに毎年繰り返し上演されて、劇団のレパートリーとして定着した。『クリスマス・キャロル』は、ディケンズが公開朗読を始める出発点になった作品でもあるが、その秀抜な「語り」に留意し、日本の伝統的な語り芸の一つである落語を意識して翻訳を試みたのは、ディケンズ学者の小池滋であった。その問題提起に答えて、日本の「語り」の伝統を研究し、未翻訳のディケンズの朗読台本の本邦初訳に取り組んだのが、新進の英文学者である広川治、佐藤真二、逢見明久の３人であった。歌舞伎十八番の『外郎売り』を思わせる物売りが登場する「ドクター・マリゴールド」（佐藤真二訳）は、朗読効果満点の語り芸の台本であるし、「ひいらぎ旅館のブーツ」（逢見明久訳）は、フィリップ・コリンズ教授編集の『ディケンズ公開朗読台本全集』と「ワールド・クラシックス」版に収録されているが、その短編を教授自身が公開朗読してみることで、朗読台本としての優秀性を実証して見せた作品である。そして、もう一本、まことにディケンズらしい波乱万丈パノラマ風放浪物語の傑作短編「哀れな旅人」（広川治訳）も、日本における新しい「文芸朗読」の語り芸のための朗読台本を目指している。劇作家であり朗読家でもあったディケンズという「もう一つのディケンズ像」の研究が、ようやく日

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

本でも始まろうとしているようだ。

結　語

『ディケンズ公開朗読台本全集』の検討を終え、その背後に巨峰のように聳え立つ全21巻の『ディケンズ全集』を視界に入れて、世界中で愛読されているディケンズ文学の核心となる思想を考えるとき、現実がどんなに暗く厳しくても、弱い人間や貧しい人々に、いつも希望と激励を与え続けてきたディケンズの人間信頼と暖かく優しいヒューマニズムの精神を支えているのは、詩人で哲学者、賢者にして愛すべき愚者ピクウィックが言った次の言葉ではないだろうか。

「この世には暗い影はあるものの、それにくらべたら、光のほうが強いのだ」　――『ピクウィック・クラブ』第57章より[80)]

あとがき

長期間にわたった「ディケンズ公開朗読全集」の研究を終えるにあたって、長い間フィリップ・コリンズ教授のテキストをお貸しくださったディケンズ・フェロウシップの日本支部長・東京女子大学教授の小池滋先生、ディケンズに関する多くの文献を拝借させていただいた駒澤大学教授の岡田尚先生、そして私の研究を支持し、共にディケンズ研究を続けて下さった駒澤大学講師の広川治氏、佐藤真二氏、逢見明久氏に、心から感謝いたします。

イギリスのディケンズ専門家の中では、ディケンズの子孫に当たる Mr. Cedric Charles Dickens、唯一無二の公開朗読全集の編者であるProfessor Philip Collins、ロンドン大学の Professor Michael Slater の暖かい激励と援助に対し、深く感謝します。

以上の諸氏のご協力がなければ、この研究の完成は実現しなかったでしょう。ワイルド流に言えば、“Whatever is realised is right.” シェイクスピア流に言えば、“ALL'S WELL THAT ENDS WELL.” ありがとうございました。

（1994年12月25日　筆者）

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

NOTES

1) "And God said, Let there be light : and there was light. And God saw the light, that it was good." (*GENESIS*, 3 : 7).
2) *THE OXFORD ILLUSTRATED DICKENS*, 21 vols., Oxford, 1949.
3) *CHRISTMAS BOOKS, The Oxford Illustrated Dickens*, 1954.
4) *CHRISTMAS STORIES, The Oxford Illustrated Dickens*, 1956.
5) *A CHRISTMAS CAROL* (*The Oxford Illustrated Dickens*, 1954).
『クリスマス・キャロル』の公開朗読は、小池滋訳により、1985年12月18日（山路ふみ子文化団)、1986年12月24日（東京・阿佐谷キ、キ、キ)、1990年12月20日（阿佐谷ヴィオロン)、1993年12月18日（阿佐谷ヴィオロン）の4回行った。「ディケンズ公開朗読全集」の朗読日程予告は、研究社の『英語青年』に発表した。
6) *CHARLES DICKENS: The Public Readings*, edited by Philip Collins, Clarendon Press, Oxford, 1975.
7) "Humbug!" (Collins' Edition, p.6).
8) See *A CHRISTMAS CAROL*, p.24.
9) See Collins, P.15.
10) See *A CHRISTMAS CAROL*, Oxford Edition, p.70.
11) Harpagon in Moliere's *L'AVARE* (1668).
12) Barabas in Marlowe's *THE JEW OF MALTA* (1592).
13) Shylock in Shakespeare's *THE MERCHANT OF VENICE* (1597).
14) "This is the even-handed dealing of the world! There is nothing on which it is so hard as poverty ; and there is nothing it professes to condemn with such severity as the pursuit of wealth!" (Oxford, p. 34).
15) See Collins, p.33 and Oxford, p.76.
16) See Oxford, p.72.
17) See Collins, pp.3-4.
18) *THE CRICKET ON THE HEARTH*.『炉ばたのこおろぎ』の公開朗読は、村岡花子訳により、1994年12月17日、「ディケンズ公開朗読全集」の最終回として、ヴィオロンで行った。
19) See Collins, p.41.
20) *THE CHIMES*.『鐘の音』の公開朗読は、松村昌家訳により、1993年12月18日にヴィオロンで行った。
21) "Spirits of the Chimes! I know that we must trust and hope, and

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

neither doubt ourselves, nor doubt the Good in one another" (Collins, p. 99).

22) A Goblin Story of some bells that rang an old year out and a new one in. See The Oxford Edition.

23) "Happy to many more whose Happiness depends on you! So may each Year be happier than the last" (Collins, p. 101).

24) *THE BATTLE OF LIFE* (1846).

25) *THE POOR TRAVELLER*. コリンズ版による原語朗読は、1994年1月17日に、「哀れな旅人」(広川治訳)の朗読は1995年2月6日の「ディケンズ公開朗読全集完結記念朗読会」で、それぞれヴィオロンで行われた。

26) "He secretly forgave him—forgave him, in the name of the Divine Forgiver" (Collins, p. 165).

27) *BOOTS AT THE HOLLY-TREE INN*. コリンズ版による原語朗読は1993年6月19日に、「ひいらぎ旅館のブーツ」(逢見明久訳)の朗読は1995年2月6日の「ディケンズ公開朗読全集完結記念朗読会」で、それぞれヴィオロンで行われた。

28) "Firstly, that there are not many couples on their way to be married, who are half as innocent as them two children ; secondly, that it would be a jolly good thing for a great many couples on their way to be married, if they could only be stopped in time and brought back separate"(Collins, pp. 178-179).

29) *DOCTOR MARIGOLD*. コリンズ版による原語朗読は1994年10月14日に、『ドクター・マリゴールド』(佐藤真二訳)の朗読は1995年2月6日の「ディケンズ公開朗読全集完結記念朗読会」で、それぞれヴィオロンにおいて行われた。

30) See Collins, p. 381.

31) *BARBOX BROTHERS*. コリンズ版による原語朗読は1994年7月15日にヴィオロンで行った。

32) *MUGBY JUNCTION*.

33) *THE BOY AT MUGBY*. コリンズ版による原語朗読は1993年10月23日にヴィオロンで行った。

34) "...the purpose of playing, whose end, both at the first and now, was and is to hold, as 'twere, the mirror up to nature"(HAMLET, Act III, Scene 2, ll. 21-24).

35) See Collins, p. 447.

36) *MR. CHOPS, THE DWARF*. コリンズ版による原語朗読は1994年4月15

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

日にヴィオロンで行った。

37) See Collins, p. 296.

38) See Collins, p. 296.

39) *THE STORY OF LITTLE DOMBEY*. コリンズ版による原語朗読は1994年5月6日にヴィオロンで行った。

40) *DOMBY AND SON, The Oxford Illustrated Dickens*, Oxford, 1950.

41) "Please, sir, I want some more" (*OLIVER TWIST*, Chapter 2, p. 12).

42) "As you are so rich, if money can do anything, and isn't cruel, I wonder it didn't save me my Mama" (Collins, p. 133).

43) *MRS. GAMP*. コリンズ版による原語朗読は1993年4月10日にヴィオロンで行った。

44) *MARTIN CHUZZLEWIT, The Oxford Illustrated Dickens*, Oxford, 1951.

45) The Wife of Bath's Tale in *THE CANTERBURY TALES* by Chaucer.

46) Nurse to Juliet in *ROMEO AND JULIET*.

47) Hostess Quickly in *HENRY IV*, Part 1 and Part 2.

48) Mrs. Malaprop in R.B.Sheridan's *THE RIVALS*.

49) Malapropism. cf.Gampism.

50) *BARDELL AND PICKWICK* from *THE PICKWICK PAPERS* (*The Oxford Illustrated Dickens*, Oxford, 1948).「バーデルとピクウィック」は、北川悌二訳で1994年2月7日にヴィオロンで朗読した。

51) *SKETCHES OF BOZ, The Oxford Illustrated Dickens*, 1957.

52) *DAVID COPPERFIELD, The Oxford Illustrated Dickens*, Oxford, 1948.『デイヴィッド・コパフィールド』は、中野好夫訳で1993年9月25日にヴィオロンで朗読した。

53) "If anything turns up" (Oxford, Chapter 11, p.168). "My advice is, never do to-morrow what you can do to-day. Procrastination is the thief of time. Collar him!" (Oxford, Chapter 12, p. 174).

54) *NICHOLAS NICKLEBY, The Oxford Illustrated Dickens*, Oxford, 1950.「ヨークシア学校のニコラス・ニクルビー」は、菊池武一訳で1994年3月4日にヴィオロンで朗読した。

55) *THE GOOD COMPANIONS* by J.B.Priestley.

56) *MR. BOB SAWYER'S PARTY* from *THE PICKWICK PAPERS* (*The Oxford Illustrated Dickens*, Oxford, 1948).「ボブ・ソーヤー氏

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

のパーティ」は、北川悌二訳で1993年7月17日にヴィオロンで朗読した。

57) Mr. Micawber in *DAVID COPPERFIELD*.

58) *SIKES AND NANCY* from *OLIVER TWIST* (*The Oxford Illustrated Dickens*, Oxford, 1949).「サイクスとナンシー」は、小池滋訳で1993年5月29日にヴィオロンで朗読した。

59) *THE HAUNTED MAN*.「憑かれた男」は、藤本隆康、篠田明夫、志鷹道明訳で、1994年7月15日にヴィオロンで朗読した。

60) "The memory be green" (*HAMLET*, Act I, Scene 2, line 2).

61) "Lord, keep my memory green!" (Collins, p. 108).

62) *THE BASTILLE PRISONER* from *A TALE OF TWO CITIES* (*The Oxford Illustrated Dickens*, Oxford, 1949).「バスティーユの囚人」は、中野好夫訳で1993年11月20日にヴィオロンで朗読した。

63) RECALLED TO LIFE.

64) "It was the best of times, it was the worst of times, it was the age of wisdom, it was the age of foolishness, it was the epoch of belief, it was the epoch of incredulity, it was the season of Light, it was the season of Darkness, it was the spring of hope, it was the winter of despair, we had everything before us, we had nothing before us, we are all going direct to Heaven, we are all going direct the other way—in short, the period was so far like the present period" (Collins, p. 280).

65) "It is a far, far better thing that I do, than I have ever done; it is a far,far better rest that I go to than I have ever known"(Oxford, p. 358).

66) *GREAT EXPECTATIONS, The Oxford Illustrated Dickens*, Oxford, 1953.「大いなる遺産」は、山西英一訳で1994年9月24日にヴィオロンで朗読した。

67) "Are you in much pain to-day, Magwitch?" "I don't complain of none, dear boy" "You never do complain." ——(Collins, p. 363).

68) *MRS. LIRRIPER'S LODGINGS*.「リリパー夫人の貸間」の原語朗読は、1994年11月11日にヴィオロンで行った。

69) *MRS. LIRRIPER'S LEGACY*.

70) *THE SIGNALMAN*.「信号手」の朗読は、小池滋訳により、「ディケンズ公開朗読全集」の開始を記念して、ディケンズの誕生日である1993年2月7日にヴィオロンで行った。

71) See *STORIES INTO FILM* by Ulrich Ruchti and Sybil Taylor, Dell

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

(Laurel-Leaf Library), 1978.

72) See Collins, pp.xxvii-xxviii.

73) Emlyn Williams introduced his evening-length solo performance as Dickens reading from his novels in 1951.

74) *DYLAN THOMAS GROWING UP* in 1955.

75) "As Charles Dickens Presenting Scenes From The World-Famous Novels And Stories."

76) *READINGS FROM DICKENS*, FOLIO Society, London, 1953.

77) *Dickens and the Theatre in CHARLES DICKENS 1812-1870*, edited by E. W. F. Tomlin, Weidenfeld and Nicolsin, 1969.

78) *CHARLES DICKENS : SIKES AND NANCY and Other Public Readings*, edited by Philip Collins, The World's Classics, 1983.

79) ここで紹介したのは、公開朗読に使用した翻訳に限った。戦前からの多くの邦訳文献に関しては、小池滋著『ディケンズ――十九世紀の信号手（冬樹社、1979）と松村昌家編『ディケンズ小事典』（研究社、1994）が詳しい。

80) "There are dark shadows on the earth, but its lights are stronger in the contrast" (Oxford, p.799).

NII-Electronic Library Service